光栄の森

平成23年12月　毎月1日発行　第42号
発行者　光栄プロテック　木之下

師走を迎えて

代表取締役　三田雅憲

暑い暑いといっていた夏があっという間に過ぎて、たちまち寒い季節の到来となっております。

11月27日の大阪同時選挙(市長・府知事)では、組織票をもたない大阪維新の会の橋本さんと松井さんが勝利し、投票率も15%以上も上がり注目された選挙になりました。私は、行政の事はまったく無知なのですが、二重行政によってみんなの税金が無駄に使用されたり、一部の既得権や特定の団体に流れ、それが慣例化して府民や市民にとって有益になっていないのなら、これは断固として見直しをしていかねばならないと思います。しかしながら、府民や市民は、そのことよりも「何かあの人、新しいことをやってくれるのではないか。」という期待感のほうが大きかったのではないかと思います。大阪都構想という高いハードルを目標設定し、それを実現するために自分の熱意というエネルギーを注ぎ込み市民にひたむきに訴える姿が、組織を超えた支持を受けたのではないでしょうか？「このままでは大阪はだめになる何とかせんとあかん」という気持ちが、人をひきつけるのではないでしょうか。

週刊誌などでは、自身の生い立ちを面白おかしく暴露されたり、本人を含む家族や子供にまで殺人予告をしてくる目に見えない抵抗勢力がいた、普通の人間であれば逃げ出してしまうような中にあっても逃げ出さない強さを持ち、そんな中で本当は弁護士もしくは芸能人に戻り安泰な生活を送りたいはずの奥さんも、影になってご主人だけでなく周りのスタッフに気配りしている姿を見て、本当に仕事とは命がけなんだということをあらためて感じさせてもらいました。自分に置き換えてみたときに、社員皆に対して『社長』はそのような姿に映っていないのではないかと反省しきりです。

会社のおいても状況は『大阪』と同じであると思います。国内で経営していくには、今後もより一層厳しさがましていくと思います。これまでのやり方・考え方・価値観だけで進めていっても、良い結果はでてこないのではないかと思うのです。無駄を省き・生産性を向上しつつ、一人ひとりが主体(自分で考え抜くこと)を持って高い付加価値製品を生み出していく。品質においては、抜群の高さをもっていなければならない。お客様に感動を与えるぐらいの仕事をしていかねば今後、国内の仕事は先細りしていく気がします。実際、口で言うのは非常に易いのですが、これを実践することは、また一大事です。私自身明確な答えに行き着いておりません。しかし、変なプライドや過去の実績にこだわるのではなく、日々気持ちを新たに進めていくことが肝要であることは間違いないのです。

今、事務の社員皆が工場のサポート・営業サポートにいろいろと動いてくれています。このおかげで仕事がつながっているといっても過言ではありません。自分達が顧客を守るというよりも工場や営業の役に立ちたいという考えでやってくれていること本当に感謝です。工場の皆も汎用・ラインの分け隔てなく、協力し合って仕事を進めてくれています。

当社は必ず生き残る会社です。皆でより一層がんばってこの荒波の中を抜けていこうではありませんか。